



Title	手書き通信の成立と拡散について
Author(s)	江口, 豊
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 70, 37-58
Issue Date	2017-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/64717
Type	departmental bulletin paper
File Information	MC70-2_Eguchi.pdf



手書き通信の成立と拡散について

江 口 豊

0 序

手書き通信 (geschriebene Zeitungen) と言われるものが北イタリアから神聖ローマ帝国の領域にいわば文化現象として移入され、拡散浸透したことは、Zwierlein (2006) が指摘した重要な点である。印刷こそされなかったがニュースや情報の流通を示した手書き通信の具体例として、その重要なコレクションであるフッガー通信については、江口 (2016b) でも紹介し、論じた。しかし、Böning (2011) らが指摘する通り、印刷形態の新聞が1605年にストラスブールで成立した後も、手書き通信は併存・競合する形で18世紀まで存在し続けた。また、手書き通信がイタリアや神聖ローマ帝国のみならず、ヨーロッパ全体にかなり広まっていたことも最近の研究で確認されつつある。小論では、この新聞の先駆形態のひとつとしての手書き通信について、フッガー通信という具体的コレクションからアプローチするのではなく、手書き通信そのものの発生と拡散を、その形態や制度・運用を含めて考察対象として、ドイツ、オーストリアやイタリアなどの研究を紹介しながら、検討してみたい。

1 手書き通信の発生と拡散

1.1 イタリアにおける手書き通信の発生

手書き通信といわれるものは、後述する通りイタリア北部で発生したと考えられる。まずイタリアにおける発生と展開について、Zwierlein (2006)、Zwierlein (2010)、Infelise (2002)、Infelise (2007) などに依って略述してみよう。

そもそも手書き通信の名称や手書き通信の製作者もしくは記者の名称はさまざまであり、Infelise (2002, 212) によれば、手書き通信そのものに対しては、「avvisi, reporti, gazette, ragguagli, nouvelles, advis, corantos, courantes, zeitungen」などの名称が使われ、書き手は「menanti, reportisti, gazzettieri」などと呼ばれていた。以下の論述ではイタリア語圏で利用されたものについてはavvisiの名称で代表させる。

1.1.1 十六世紀前後のイタリアの政治情勢およびローマとヴェネツィアの役割

周知の通り、16世紀のイタリアは、教皇領の他に、主要な勢力だけでもヴェネツィア共和国、フィレンツェを中心としたトスカナ大公国、ミラノ公国、サヴォイア公国、スペインが実質的に支配していた両シチリア王国などが群雄割拠する地域であった。しかも、それぞれの領域内外の小規模諸侯も自己利益を追求し、スペイン以外にもフランスや神聖ローマ帝国も影響を直接、間接に行使する状況であった。そうした当時のイタリアには誰にも無視できない都市が二つ存在したが、それがローマとヴェネツィアである。

「ローマと教皇庁は業務の中心であり、誰もが外交使節や代理人を置いていた」(Zwierlein 2006, 190)。17世紀の歴史家 Vittorio Siri はすでに「外交使節と高官が多数」いる上に、「諸侯の事情に精通した人がある」点を指摘している (Infelise 2002, 213)。また、「手書き通信の書き手 gazzetteer である Maiolino Bisaccioni は、ローマは世界のニュースがすべて見つけれられる場所だ」とまで述べている (Infelise 同上)。外交の中心ローマに「誰もが外交使節や代理人を置いていた目的は、早期に他の諸国、諸侯の意図を探り、自身の権利関係への介入や干渉から身を守る」ためであった (Zwierlein 同上)。とりわけ手書き通信成立上決定的な衝撃を与えた事件が、1494年のフランスによるイタリア侵攻であった。

一方、政治上の中心地ローマに対して、政治のみならず経済的にも地中海世界との関係で重要性が突出していたのがヴェネツィアである。ビザンツ帝国やその後のオスマントルコとの関係、香辛料などの東方交易などが、その存在意義を増す要因となっていた。Infelise は、手書き通信の発祥地について、「16世紀の avvisi のルーツはおそらくヴェネツィアにあるかもしれない」と推測している。このヴェネツィアでは、「中世末期、情報は何よりも商業上の資産であり、情報流通の主要手段は商人の書簡だった」(Infelise 2007, 33)。その旺盛な情報活動の一端を如実に示しているのが、ヴェネツィアの都市貴族 Marino Sanudo の40年分の日記にある手紙の着信記録（以下は1519年11月の約一週間分のみ）である (Infelise 同上, 37)。

- ・ 1519年11月2日：ローマ、ナポリ駐在の各外交使節、バルセロナの Francesco Corner、シチリア島トラパニに投錨していたガレー船船長、ギリシャのコルフ島の司政官から
- ・ 1519年11月3日：フランス、スペイン、ミラノ駐在の各外交使節から手紙
- ・ 1519年11月4日：コンスタンティノーブルから手紙（即座に行政府で朗読）
- ・ 1519年11月7日：ダルマティアの複数の教会関係者から
- ・ 1519年11月8日：ヴェローナから、（現クロアチア）イストリア半島地域から東方地域の情報、ミラノ、フランスから
- ・ 1519年11月10日：ハンガリー、フランス、ミラノから

1.1.2 avvisi の成立と形式の定着

こうした商人の旺盛なコミュニケーション活動に、政治的な次元でのコミュニケーション活

動が重なっていく。「1490年代に、情報のための外交使節の必要性の増大が、情報収集を強化し、情報入手のスピードアップに貢献した」が、大きなきっかけとなったのは上に挙げたフランスのイタリア侵攻である。当初、「外交使節は直接目にしたことだけを報告する傾向があった」が、その根拠とされるのが、「一人称の文での会議や交渉の説明」だと Infelise (同上, 34) は指摘する。「1471年から1473年までナポリに派遣されたヴェネツィアの使節 Zaccario Barbaro も個人的に見たり聴いたりしたことを報告していたが、その後時折、海外からナポリに到着したニュースを、すべて報告しなければという義務感から、多少信頼性に欠けると承知していたものの、ヴェネツィア当局に情報の確認を求めつつ、同封」し、発信することになる。「Barbaro のニュースは商人の手紙が情報源で、多くがジェノバ商人に」よったらしい。この種の情報形態の雛形となったのが、「1470年から1480年の間に、多くの外国使節や廷臣と書簡のネットワークを築いていた Benedetto Dei」という人物が始めたとされる「自らの書簡に短い情報メモを添えた」形式である。「これが後に avvisi 全般に使用されたスタイルと同じもの」だというのである (Infelise 2002, 39)。商人による情報の利用に際して、外交使節などの「公式通信と私的書簡とがたとえ同じトピックスを扱うことがあっても決して同じ情報を伝えない」よう配慮され、「私的な説明文は細部を補足して伝え、ある出来事について証言できるような人からの別の視点を提供できる」ようにされたと Infelise (同上, 37) は説明している。また、外交レベルの報告では、「(書簡や通信の) 相互参照がふつうであり、どの手紙や通信も他の手紙や通信を参照する」ように作成されていたとされる (Infelise 同上)。

「15世紀末以降、外交使節が事件などのニュースの収集や編集制作の現場であり、提供者でもあった」が、そういう意味で「menanti (通信の記者) はニュース収集の上で便利な存在」であった。「外交使節の主たる義務の一つが定期的な外交報告を編纂、編集すること」であり、「自身のコメントや情報について他の情報源による確認が必要で、そこで avvisi に依存し始めた」が、具体的には「外交報告に avvisi を同封」することが行われるようになったのである (Infelise 2007, 43)。「17世紀のスペインの外交官 Juan Antonio de Vera が著した『完璧な外交官』では、「公式の外交報告がローマやドイツのニュース通信と同等に取られてはならないことが不可欠である」と述べているが、これは実際の外交官たちが avvisi に頼るケースがあったことの証左とも取りうる。実際、「外交の世界と avvisi の職業記者との結びつきがますます強固で緊密になって」いき、「外交使節を広範に配置できない弱小国は、ローマやヴェネツィアの avvisi の年間購読でまかかった」と指摘されるほどである (Infelise 同上, 44)。

こうして avvisi というコミュニケーション形式が定着すると、その文体やレイアウトも定式化していく。とくにヘッドラインが導入され、いわば「手紙のコピー」から「手紙からの抜粋」や「avviso の要約」へと進み、「実際の手紙とはまったく異なる様相」を呈するようになる。具体的には、「16世紀初頭に、1514年3月15日戦場からのニュース、1514年3月30日ヴェネツィアからのニュースというようなヘッドラインが見受けられる」(Infelise 同上, 40)。ここで注

意すべきなのは、地名はニュースが集められた場所であって、ニュースで報じられる出来事が起こった場所ではないということである。このように表記するのは、「ニュース項目が直接その場所から送信されたのか、中間のチャンネルを通してのものかを示す必要があった」からである（Infelise 同上）。また、「意図的か否かはともかく、オリジナルの著者や情報源の氏名を除外したことが、より近代的なニュースや情報ネットワークの発展の点で重要な契機となっている」。これが「私的書簡から、意図的に一般向けでやはり匿名の公共向けに書かれた avviso への変身を示している」。とくに「avviso からますます著者名が除外されるようになったが、とくに何度もコピーされるとそれが顕著」になり、「著者自身も、情報分野で徐々に専門化していき、部分的には配慮から署名しなくなっていく」（Infelise 2007, 38）。

先に紹介した avviso の書き手を、ローマでは *menanti*、ヴェネツィアでは *reportisti*、ジェノバでは *novellari*（ドイツではこの語形に近い *Novellanten* という表現が流布した）、さらには後世での呼称である *gazzettieri* も使われた。活動内容は、「他人が編集した手書き通信 (*newssheet*) をコピーする場合と、現在の意味での通信社のような場合もあった」。つまり「海外からの通信や avviso を入手し、有力者の交友範囲で情報収集し、聞き耳を立てて取材したゴシップなどの土地のニュースを追加する」などの取材と編集を活動業務とする場合である。¹⁾

Infelise は、手書き通信の購読者の需要により、「よく知られた出来事についての説明を付した公共的な avviso」と「内密な情報を備えた秘密の avviso」とを区別する（Infelise 同上, 42）さらには、「公共的な avviso（質的には高くない）」と「秘密の avviso（非常に限定された読者層に向けられたもの）」以外に、「定期的 avviso（16世紀半ばに秘密タイプとの対比で成立）」という範疇も立てられることがある。ただし、秘密の avviso と定期的な avviso との区別は流動的なものである（Infelise 2002, 216f.）。こうした avviso の多面性が、16世紀後半に avviso による情報流通を管理監督しようとする動きにつながる。

1.1.3 avviso をめぐる実態と情報の漏えいおよび管理監督の試み

十六世紀中頃には、avviso 制作のための「情報の収集と編集がすでに確立された職業」となり、「ある種の人々にとってはフルタイムの仕事」となっていた。すでに「1579年時点で、ローマの手書き通信の記者数は膨大であったし、その後数十年間それが変わることはなかった」とされる。avviso 浸透の例として、「マニュアル書や秘書業務の課題に関する書籍にもモデルとしての手書き通信が普通だった」ことも指摘されている。それどころか、今日の *disinformation* を思わせるように、「架空の avviso のかたちで戦時に間違った情報で敵の行動に影響を与えることを論じる」政治書さえあった（Infelise 同上, 215）。

取材の実態として、「海外からの書簡が到着する他国の大使」の居場所、「権力者や有力者の控えの間に入り込んで、情報を掻き集める」ことが行われたが、ヴェネツィアの avviso 記者は、「サンマルコ地区と郵便局との間に独自の事務所を構え、人を雇い、avviso 業務にあたるだけ

ではなく、政治的な性格をもった文書、はては魔法や無神論まで、手書きの写本も販売した」とされる (Infelise 2002, 218)。

秘密のavvisiであれ、比較的購読対象が緩やかな一般向けavvisiであれ、作成段階と購読段階とを問わず情報内容の漏えいがあったのは間違いない。情報リーク的具体例として「1579年サヴォイア公宮廷に派遣されたヴェネツィア大使Francesco Barbaroの外交報告」が挙げられる。Barbaroは「トリノで二つの報告を目にする。一つは公的なavvisiであり一般的で、ニース商人に見せられたもの。もう一つは古典的な秘密報告で、ローマからトリノ駐在の教皇特使に送られたもの」であり、「教皇特使がローマのavvisi記者から受けたものだが、この記者が制限もなく誰でも買えるものとしてローマ市内で買い取ったものであった。Francesco Barbaroは、ほとんど一言一句違わず枢機卿たちが極秘会議でローマとパリとの関係について発言した意見を報告のなかに見つけた」というケースである (Infelise 2002, 220)。逆にローマに着信した場合についても、「最良だとされるヴェネツィアのavvisiは、まず教皇に手渡され、外務局長を経由して、甥の枢機卿に届けられた」。「こうした経過のすべてで情報が漏れうるのは、……どれだけ容易であろうか」、「ヴェネツィアでもローマでも、ある段階でニュースを途中で抜き出したり」できたというのである (Infelise 同上, 219)。無論、「こうした (情報の) 公表は争いの原因になりえた。またローマとヴェネツィア間の関係に関わる繊細なニュースや、交渉中の問題に関する高度に内密な議論が素早く表に出てしまったし、誰もこうしたリークを止められなかった」と、情報の漏えいに対する無力感さえ指摘されている (Infelise 同上)。

Zwierleinはavvisiのもたらす予期できなかった影響として「国家によるアウトソーシングの意図せざる効果として『公共圏』が成立し、国家によってはほぼ管理不可能になる」点を挙げている。アウトソーシングは、「外交使節、抽象化すると、国家機関の初期形態が、純粹外交上のコミュニケーションにさらに集中できるように、定期的な一般報告を外部の『サービス事業者』に委託することだが、同時に一般報告を放棄することなく」すませることだと説明される。しかし、「外部ソースは内部のように管理できない」事態に立ち至る。それは、「avvisiによるコミュニケーションを利用する同じ権威が、アウトソーシングによる公共圏効果を認識しながら、それをまったく是認できない」という矛盾に直面し、「avvisiコミュニケーションの担い手が当局の管理の対象に入ってしまう」ことを意味する (Zwierlein 2006, 265)。こうしてavvisiについて監督管理する動きも出てくる。「ヴェネツィアでは15世紀すでに、十人委員会が国家機密に関する裏切り者に対して取締りを強めていたことがよく知られてい」て、「とりわけ問題になったのは、教皇派とされた貴族層や家系で、教会による俸禄や地位を授けられていた者たちから枢機卿に至るまでが、忠誠心の葛藤に陥った」 (Zwierlein 同上, 265)。以下に年表式に関連する事件例を挙げる。

1569年もしくは70年 教皇ピウス5世が中傷的な通信の著者を処分すると宣言

1570年3月11日 Niccolo Francoが訴追され、有罪とされ絞首刑

1571年 教皇ピウス5世、avvisi制作を禁止

1572年 ヴェネツィア十人委員会がavvisi制作にガレー船乗船5年の罰を設定

1581年 avvisi記者であるLuperzioが終身刑

1587年 Annibale Cappelloは秘密情報漏えいの罪で拷問、処刑 (Infelise 2002, 214f.)

教皇ピウス五世がavvisi統制の実践として「控えの間に何人も入室させず、密談や交渉を聞かれないようにした」(Zwierlein 2006, 267) という話もあるが、「avvisi制作の完全な禁止を意図したわけではなく、中傷文書や国家機密漏洩に向けられた」に過ぎない (Zwierlein 同上, 270)。結局、「人々は用心深くなっただけで、同時に誰であれ、こうした通信を壊そうとした人々を含めて、こうした通信は不可欠だと認識」していた。また、「監督管理は組織的には行われず、乱雑なもの」で、「猥褻なものにあたる傾向」もあったらしい (Infelise 2002, 215)。

1.1.4 イタリアにおける手書き通信制度の意義

avvisiの配信を可能にしたのは、1490年の記録に表われるタクシス駅通の存在である。「16世紀前半の駅通制度の劇的な改善により、高価ではあるが、誰にでも利用可能な公共サービスとなり」、「駅通のルートも大陸ヨーロッパ全体に広がった」。「定期的な収集と配達時間の固定化」を背景に、手書き通信は基本的に「駅通のスケジュールに合わせて書かれ、筆写されるようになった」。かつてなかった効率的な駅通により、ローマから発信された手書き通信は「ヴェネツィアまで4,5日、ミラノまで8日、ウィーンまで12, 13日、パリまで20日」ほどで到着した (Infelise 2007, 41)。駅通を含めZwierleinは「avvisiコミュニケーションが成立する三つの基盤として、……私用かつ経済目的で利用可能な駅通としての輸送媒体、蓄積媒体としての紙、職業的匿名性の書き手による複写媒体」を挙げている (Zwierlein 2006, 271)。

後にヨーロッパ全体で繰り返されることであるが、「ニュースに対する真の市場は16世紀半ばに」まずイタリアで「発展した」のである。またドイツ語圏など他地域への拡大を可能にする素地の一つとして、手書き通信記者にはイタリア人ばかりでなく、Nicolas de Stoop (オランダ人) のような外国人も1558年から1563年の間に活動したことは注目すべき点であろう (Infelise 同上)

イタリアの場合も、印刷新聞が手書き通信と共存した。それは、「手書き通信は書くのも筆写するのも早く済み、個々の顧客に適応できた」ため、「印刷新聞が手書き通信と完全に入れ替わることはできなかった」からだとされる。逆に17世紀後半にミラノ、トリノでは一種類だけ印刷新聞が許可されたものの、「ニュース項目の編集に関して、印刷新聞向けに記事を書いた記者は、素材となるニュースに大きな変更を施す時間が無く、大急ぎで印刷所で作業した」という実態もあった (Infelise 同上, 226ff.)。²⁾

1.2 イタリア以外の地域への手書き通信の拡散

歴史的な経緯、経済的な結びつき、統治上の連続性などから、ローマとヴェネツィアを中心とした手書き通信はイタリアに留まらず、アルプスを越えヨーロッパ内で拡散していった。神聖ローマ帝国内という意味でも、それはドイツ語圏に限定されない。また実質的に神聖ローマ帝国から離脱したスイス連邦にも手書き通信のコレクションが確認されている。そうした最近のさまざまなコレクションの調査研究を通じて明らかにされた拡散について、以下にŠimeček (1987)、Barbarics (2005)、Barbarics-Hermanik (2011) などを手がかりに見てみよう。

1.2.1 ボヘミア

Šimeček (1987) は、「16、17世紀ボヘミア諸侯による手書き通信の受容」について調査した。受容者層は他の地域同様、主として高位貴族であり、「世の中の政治的出来事について知っておきたいという需要」が動機になっていたとしている。市民層などは資料が少ないものの、最有力貴族に仕える者は例外的に手書き通信内容にも精通していたらしい。分布地域として挙げられているのは、「16世紀末時点で……プラハの旧市街、ブリュン、エゲルなど」である (Šimeček 1987, 71f.)。

ボヘミア地域で最大の手書き通信資料とされるのは、現在のチェコ共和国トシェボニユ Třeboň (ドイツ語名 Wittingau) にある Rosenberg 家のコレクションであり、1590年代の手書き通信に加えて、定期的な見本市通信 (他のニュース印刷物は無し) も確認されている (Šimeček 同上, 72f.)。収集者は、16世紀後半ポーランド国王選出にも関与し、自身も候補に取りざたされた Wilhelm Rosenberg と Peter Vok である。Peter Vok は、皇帝 Rudolf に対立する派閥とも連携していたとされる。二人は週に一度のペースで手書き通信をプラハの駅通局長から購入していた (Šimeček 同上, 73f.)。料金については、「プラハ駅通局長は半年の購読料15ターラーで手書き通信を提供した」ということで、年間に換算すれば30ターラー、約54グルデンとなる (Šimeček 同上, 77)。

ボヘミアでも駅通との結びつきは重要であり、「アウクスブルクからの郵便にイタリアの通信 (ローマとヴェネツィア)、ケルン発の郵便にはケルン、アントワープの通信、リヨン発の郵便にはスペイン通信、プラハからの郵便にはウィーンとプレスラウの通信が付されて」いた。「ウィーンの通信には、グラーツ経由でクロアチア通信、ズィーベンビュルゲン、ワラキアやモルダウ (すべて現在のルーマニア) も含まれていた」。「西欧からの通信との大きな相違は、特別通信が追加されることで、ハンガリー発の通信は、対トルコ戦役のニュースがとくにプラハで関心を呼んでいた」。さらに「ズィーベンビュルゲン経由でグダニスクやバルト諸国、ポーランドのニュースも伝達」されていた。通信の到達速度については、「Rosenberg と Vok が3日ごとにウィーンからの通信を受信し、ハンガリーからの戦役通信は1週間で到着 (戦役参戦者からの直接通信が競合)」した (Šimeček 同上, 73f.)。

Šimeček は手書き通信の制作者の例も紹介している。それが「皇帝伝令官 Peter Fleischmann で、発注者（ダンツィヒ、ブリュン、エゲルの都市書記）のためにプラハから直接毎週の手書き通信を自ら記した」というのである。「Fleischmann は、毎週の手書き通信で、帝国駅通がそれよりもずっと早くエゲルに着信済みで、顧客にすでに知られていたと分かっていたニュースを含めなかった」。また、「帝国駅通のプラハ局長は、ボヘミア地域内の通信受信者に対して、とくに西ヨーロッパ発の通信や、帝国内であればウィーンとプラハのニュースに重点を」置いていた点も指摘されている（Šimeček 同上, 75f.）。

コレクションの例外的なものとして見本市通信が挙げられているが、プラハにはもちろん他の印刷された通信もあった。非定期的な印刷ニュースである Neue Zeitung がその一つであり、「プラハの印刷業者は1591年から1599年の間にチェコ語で68点、ドイツ語で40点の Neue Zeitung を発行した」とされる。関心の対象はいわゆる対トルコ戦役であった。Neue Zeitung は「個別販売であり、高額な定期購読が不要の読み切り」だった。それが魅力だったのか、「Neue Zeitung は当初 Johann Schumann により発行されていたが、彼の死後印刷販売に関する争いが起こり、プラハの大司教の仲裁で印刷業者が月替りで、印刷を担当する方式が取られた」（Šimeček 同上, 78）。Šimeček（同上, 76）はこの Rosenberg コレクションとフッガー通信との比較もしたらしく、「1591年の Wittingau の手書き通信とフッガー通信とを比較すると、プラハの駅通局長から発信されたものと同一であること」を確認している。

1.2.2 ハンガリー、スイス、オーストリア本国

Barbarics (2005) や Barbarics-Hermanik (2011)³⁾ では、イタリアやドイツにのみ焦点が当てられていた手書き通信について、ハンガリーなど他の地域での通信コレクションの存在を指摘し、フッガー通信に偏重した従来の議論を批判している。

Barbarics はハンガリーにおける手書き通信コレクションを紹介しているが、「外交通信、商業通信、私的通信などの情報の統合として handgeschriebene Neue Zeitungen を捉えている」（Barbarics 2005, 184f.）。そこで扱われているコレクションは、ハンガリー貴族で軍人かつ商人でもあったナーダシュディ タマーシュ Nádasdy Tamás (1498-1562) が収集したもので、彼は膨大な所有地にもとづきベネツィアとの家畜、穀物、ワイン商売も営んでいて、後のハンガリー副王にもなった人物である。収集期間は1540年代、1550年代および1560年代始めとされ、このコレクションの特徴は、「発信者も受け手も匿名であること（Barbarics 同上, 181）発信者が聖職者であること、国家自体がこの情報の受け手であり、伝達内容へ何ら影響行使できないこと（Barbarics 同上, 189）、しかし一部の政権が禁止や検閲を試み、記者に対する裁判の記録もあること（Barbarics 同上, 190）、やはり18世紀末まで継続したこと、外的体裁（タイトル、編集した地名と日付、複数の通信）は200年間ほぼ変わらなかったこと、1、2ページで、通信を4本から6本含む構成だったこと（Barbarics 同上, 190f.）、収録された通信数が62

通（32通はイタリア語、27通はドイツ語）という概要である（Barbarics同上, 181, 189ff.）。収集者ナーダシュディ タマーシュはグラーツ、ローマ、ボローニャで学んだため、もっぱらイタリア語とドイツ語で書かれた通信を読むのに問題はなかったと考えられる。通信の発信地構成は、「イタリア68.8%、フランス9.8%、オランダ8.1%、オスマントルコ6.5%、神聖ローマ帝国内4.9%」で、「ニュース編集都市から概ね14日間かけてハンガリーに到着」したことが確認されている（Barbarics同上, 190f.）。

情報が必要とされた背景としては2点挙げられている。それは「オスマントルコによりハンガリーの一部が占領され、ハプスブルク家はこれに対処できる財政的余裕が無い」という状況で、「領土上の統一がハンガリー側の目標であったこと」、また「ハプスブルク家領内における1527年の行政改革によりハンガリー等族が発言権を喪失していたという緊張関係があった」ことである（Barbarics同上, 187）。

Barbarics-Hermanik (2011) は、上記のナーダシュディの手書き通信コレクション研究を拡大させたもので、「手書きと印刷の並存、とりわけ印刷術の第二世紀、とくに1540年から1640年における手書き通信が書籍の展開にも貢献したこと」を強調し、「印刷の黄金期に新たな手書きのメディアが成立した」（Barbarics-Hermanik 2011, 347）ことと併せ、「近世期のメディアはもっぱら印刷の観点から分析されてきた」という批判をしている。この種の議論については後に紹介するZwierlein (2006) の影響もあると考えられる。⁴⁾ 再三指摘されることであるが、印刷メディアと手書き通信等の「両者は競合的ではあるけれども、相互影響関係にあった」。

手書き通信のコレクションに関して、従来イタリア（ローマ、フィレンツェ、モデナ、マントヴァ、ヴェネツィア）、スペイン（シマンカス）、フランス（パリ）、イギリス（ロンドン）、スウェーデン（ストックホルム）、ドイツの諸都市（マールブルク、カールスルーエ、シュトゥットガルト、ベルリン、ヴァイマル、バンベルク、ドレスデン、ライプツィヒ、ヴォルフエンビュッテル、シュペリー、ニュルンベルク、アウクスブルク、ミュンヘン）などで確認、調査されているが、Barbarics-Hermanik (2011) はチューリヒ、シュテッティーン、グラーツ、ウィーン、ブダペストにもあることに着目し、その内容も含め、手書き通信コレクションの広範な比較検討の必要性を強調している。彼女が、特に考察対象としているのが、「ブダペストのナーダシュディ タマーシュやトウルゾー ジェルジ（Thurzó György）⁵⁾、スイス、チューリヒのハインリッヒ・布林ガー（Heinrich Bullinger）やハンス・ヤーコップ・ヴィック（Hans Jakob Wick）、ウィーン帝国図書館司書フーゴ・ブローティウス（Hugo Blotius）、オーストリアのシュタイアーマルク地域の貴族、グラーツの大公らの各コレクションである。これらのコレクションにある手書き通信は16世紀後半から17世紀前半にかけてのものであり、三世代のコレクション比較が可能」だとしている。これらのコレクションに共通の背景として挙げられているのは、「神聖ローマ帝国とオスマントルコ、宗教改革と反宗教改革」という二つの対立軸である。また、他の手書き通信では常に基盤インフラとしてタクシス駅連の存在が認められる

が、「ナーダシュディとトゥルゾーはこれを利用する状況になかった」(Barbarics-Hermanik 同上, 352f.)。

手書き通信の収集期間、紙面構成、使用言語、配信頻度、最大の特徴としての匿名性については、Barbarics (2005) の主張に沿っている。受容者と手書き通信コレクションの動機についても、ドイツ語圏での手書き通信研究で指摘された以下の点で重複する (Barbarics-Hermanik 2011, 360)。「受容者の社会層は、君主、商人、人文主義の学者、宗教改革派や修道会士、政治的エリート層など」で、いわば「人文主義的伝統にそった教育を受けた者、人文主義的理想や価値を体現し」、広める側の人間であり、「手書き通信にも印刷物にも慣れ親しんでいる」集団としている。彼らは「複数のコミュニケーションネットワークに関与し」、「家族的結びつき、共通の政治的、宗教的、経済的関心」で結ばれており、コレクション収集者の多数は新教派である。また情報入手の動機として外的な政治経済情勢への関心の他、収集者自身の境遇として「権力者になった時か失った政治的影響力を再び獲得した場合」を挙げている点は興味深い (Barbarics-Hermanik 同上, 362)

Barbarics は手書き通信の成立プロセスについて以下の四段階を提起している (Barbarics-Hermanik 同上, 358)。

- 1) 純粋なニュースが個人的コメントから分離され、書簡の末尾に固定
- 2) Nova, novissima, avvisi などの表題の下に段落として分離
- 3) 別紙に分離して記載され、本来の書簡に添付
- 4) 手書き通信が制作され、筆写により複製され、独立した媒体として流布

また、Barbarics は、手書き通信と制作者について、Syncretism (融合) と Hybridisation (混成種形成) という二類型を想定している。Syncretism (融合) では、専門職業的手書き通信で、手書き文書、印刷物、口頭コミュニケーションなどさまざまなものから情報を取り出し、編集していた。それぞれの間には関連は無かった。編集してまったく新しいニュースを作成し、筆写を作成し、いわば商品のように予約者に配信したものである。Hybridism (混成種形成) では、非専門職業的手書き通信制作者が、ニュース書簡を友人、親戚、同志 (仲間) に無報酬、不定期で発信したケースを想定している。ニュース書簡編集でのソースは一つのみで、通常の手簡にオリジナルニュースのソースを添付するというパターンの混合を意味しているのである (Barbarics-Hermanik 2011, 360)。

Barbarics は専門職業的手書き通信記者の成立について、「16世紀初期イタリアでの職業組合 poligrafi の成立と密接な関係」があるとしている。彼らは「人文主義教育を受けた書記で」、「文学的テキストや公的文書のコピーや作成で生活」していた。「顧客は私人や諸侯宮廷の秘書や官吏で」あり、この「poligrafi の一部が手書き通信の編集とコピーに専門化した」としている。Barbarics は、規模の大小はあっても「ニュースオフィス」が設けられたこと、その例として、17世紀ヴェネツィアの Giovanni Quorli のニュースオフィスが60件以上の顧客を、アウクスブ

ルクの Jeremias Krasser のニュースオフィスが10件から15件の顧客をそれぞれ抱えていたことを紹介している。またフッガー家が典型例であるが、特に商人や貴族層の場合、通信の提供者を複数契約する一方で、通信の提供側も今述べた例のように複数の顧客を抱えていることが常態だったと考えられる (Barbarics-Hermanik 2011, 364f.)。

2 手書き通信のドイツへの伝播

ドイツ語圏以外にも *avvisi* が流布していた実態について前節で紹介したが、手書き通信システムの地理的な拡大について、Barbarics は四つの段階を仮定している (Barbarics-Hermanik 同上, 365f.)。

- 1) 1540年代~1570年代:手書き通信の制作はイタリア (ローマとヴェネツィア) に限定
バルカン半島西部とコンスタンティノーブルやアントワープが重要な地位を占める。
- 2) 1570年代~1580年代:発送された手書き通信の量が倍増
アントワープの重要性が増加、1580年代末ハプスブルク家所領のオーストリア、ハンガリー、ボヘミアでは定期的に手書き通信を制作した。
- 3) 1590年代オスマントルコ領ハンガリー (トランシルヴァニアと南部ポーランド) が手書き通信のシステムに組み込まれる。
- 4) 17世紀前半には、手書き通信システムが欧州北部にも到達。ブレーメン、ハンブルク、アムステルダム、ロンドン、グダニスク、モスクワでも制作された。

ここには神聖ローマ帝国の中部や南部が触れられていないが、フッガー通信の最古の部分の年代から、1560年代末にはドイツ南部にも拡大したと言えよう。以下に、そもそもイタリアからドイツへの手書き通信の伝播がどのように展開したのかに注目してみよう。

2.1 Zwierlein による手書き通信成立の仮説

この問題について最初に決定的な知見をもたらしたのが Zwierlein (2006) である。Zwierlein (2006) は、近世ヨーロッパに与えたマキャヴェッリの影響を、とくに思考の枠組みとしての *discorso* 概念の展開を中心に論じようとした。歴史上の議論の根拠として挙げられているのは、イタリア、フランスにおけるユグノー戦争を背景としたサヴォイア=ピエモンテ公国と南西ドイツ諸侯の様々なコミュニケーションをめぐる事象である。

まず Zwierlein は、マキャヴェッリの『ローマ史論』等による *discorso* 概念の浸透を通じて招来された状況として「少なくともイタリア語領域では手書きコミュニケーションも……非常に重要な役割を果たしていた。……大小を問わず権力者の置かれた特定の政治的状况に対して設定された *discorso* の数々が、職業的なコピー筆記者の拡散網で広まっていった。ヴェネツィアやローマの手書き通信 *avvisi* だけが書き写されたのではなく、政治的な *discorsi* も、ヴ

エネツィアの大使報告も、教皇特使の指示も教皇選挙の報告も、他の容易に一般的なジャンルにまとめられ難いテキストも、いわば『即コピー対応の複製システム』のレパートリーに含められ、希望に応じて取りまとめられていた」と述べ、「近世におけるこの職業的な複製製作は、…中世の大学での教科書の複製手法と比肩できるものであろう」と指摘する（Zwierlein 2006,183）。

現状展望（Gegenwartshorizont）にもとづき将来の計画（Zukunftsplan）を立案するという、こうした思考の枠組み（Denkrahmen）の普及にあたって、印刷媒体が排除された背景として、「議論を暴発させかねない政治理論的な discorsi はできれば非常に限定された読者層に留保しておきたかった」ため、「例えばヴェネツィア共和国は常に大使報告の印刷を禁じていた」（Zwierlein 同上, 183）ように、情報流通の制限を求める一方で、イタリアとドイツ語圏の間の「公開情報と秘密情報の分布の相違」や「歴史的にドイツが羊皮紙から印刷の時代一気に飛躍した」のに対してイタリアは紙と手書き文書の時代を経過していたことを挙げている（Zwierlein 同上, 562）。イタリアが手書き文書の興隆期である根拠の一例として、「手書きコピーのとてつもない量の多さ」を指摘し、「……匿名で大量の購入者層である枢機卿、貴族、駆け出しの秘書たちや王侯のためにこれらのテキストが複製されていたこと」に触れている。文書複製のシステムの存在について、「筆跡の同一性、一ページあたりの行数や一行あたりの字数が定められていること」などを根拠として、「突発的なその場限りの書き写しではなく、職業的な制作であったことを証明している」し、「代金も上記の規定を踏まえたページ数を根拠に支払われた」ことまで述べている。あまつさえ「印刷業者のカatalogや見本市カatalog同様に、こうした複製業者の筆写による複製文書のカatalog」が存在し、複製可能なテキストが挙げられていた（Zwierlein 同上, 184）。この複製文書には、各諸侯の政府文書も含まれており、「複製業者が表立って商品として宣伝していた」が、「文書目録の前に付された短いテキストは」、「諸侯とその従者にとっては他の諸侯の政府文書を持つことがどれほど重要であるか、そしてこうした文書を読むことが、印刷された歴史書に比べ、自身の国家政府のためにさら何倍も重要であるか」と謳っていたほどである（Zwierlein 同上, 189）。「ドイツの諸侯ですら製本されたこの種の文書を購入していた」（Zwierlein 同上, 209）。

こうした考え方が、政府関連の文書の一部として外交報告に向かえば、1.1.1 で紹介した通り、Infelise が avvisi 成立の根拠として挙げた外交報告の複写の流通とも結びつくのである。つまりマキャヴェッリ流の新しい（とZwierleinは主張する）政治思想とその政策実践の浸透という要因と、紙の一般的大量消費という文明的要因、さらには印刷に対する検閲という統治上の要因が手書き通信 avvisi 成立の背景だとする考えである。一度 avvisi が成立流布してしまうと、「1580年頃の宮廷従者養成のアドバイスの一種として……現時点での出来事を追求するために手書き通信 avvisi を欠かさず読むことで完璧を期す」ことを求めるようになる（Zwierlein 同上, 190f.）。

Zwierleinは、avvisiの特性にも着目し、そこに記された「ニュースは、狭義には本来の発信者と受信者の関係や問題への特別な関連付けを持たないまま記述されるものであるため、ほぼ情報の喪失無しにコピー可能である」こと、さらに「コピー行為の決定的な部分とは、本来のコンテキストからの転用と、それが匿名化によりさらに強化され、ニュース内容に集中する」点を強調する。なぜなら、「こうした特徴に近代の現状展望の発生へのきっかけがある」と考えるからである（Zwierlein 同上, 227）。

2.2 ドイツへの手書き通信の拡大

前節での手書き通信成立の仮説を基本に、Zwierleinはサヴォイア＝ピエモンテ公国と南西ドイツにおける思考の枠組みの浸透について、1562年から1598年まで八次に亘ったユグノー戦争を背景として説明を試みている。Zwierleinがavvisiの拡大普及の背景要因として考えているのは、(1)宗教戦争であるユグノー戦争、(2)宗教改革がとくにドイツ社会に与えていた影響、(3)神聖ローマ皇帝を含むドイツ諸侯に関する常駐外交使節の不在、(4)avvisi受容者であるエリート層の人文主義教育とイタリアへの遊学経験、(5)新たな思考の枠組みとしてのdiscorsoの浸透、(6)フッガー家という財政的にも傑出した当事者、などと推測される。

2.2.1 ドイツ内外の政治状況とメディア状況の特殊性

ユグノー戦争はドイツにも大量のカルヴァン派難民の流入をもたらしと同時に、ドイツ諸侯とフランスとの軍事的な小競り合いも引き起こした。「多くはユグノーである印刷業者、書籍商人、出版人が宗教戦争のためにドイツに流入」した（Zwierlein 同上, 569）。それでなくとも、新教旧教の対立の中で「16世紀後半、甚だしい論争性や党派性を帯びたドイツの印刷物が、神聖ローマ帝国における宗派的分裂を反映していた」（Zwierlein 同上, 567）。その量についても、「パリのカトリック同盟のパンフレット制作が1585年から1594年まででせいぜい約1000種類で、現存するのは870である」（Zwierlein 同上, 567）ことと比べ、ドイツでは「パンフレット製作の突然の爆発（的增加）が1517年から1525年の8年間に約1万種類のパンフレットを生み出したほどだった（Zwierlein 同上, 565f.）。しかも印刷物の量だけでなくその内容が問題となる。「ドイツ語圏とイタリアの小印刷物（チラシや印刷されたavvisiなど）で、16世紀のフランスの事件や人物に関連したもの」を調べ、「1559年から1600年までのドイツの約750から800件」と「1559年から1571年までのイタリアの…約450件」を比較したところ、ドイツでは「50%が明確に反カトリック的もしくは親ユグノー的であり、11%が親カトリック的もしくは反ユグノー的で、34%が中立的であった。…5%は美的テキストのジャンル」であった（Zwierlein 同上, 563）。このメディアの党派性が重要なポイントに浮かび上がってくる。「党派性を帯びたテキストとそうでないものの比率は、1559年から1600年までを対象にすると、ドイツとイタリアとで逆の配分」となり、ドイツでは党派性ありが61%、党派性無しが39%なのに対して、イタリアで

は党派性ありの場合が30%、党派性無しが70%となる（Zwierlein 同上, 564）。「イタリアではドイツと比較して、扇動的で議論誘発的な印刷物のはるかに少なかった」ことになる（Zwierlein 同上, 562）。⁶⁾

2.2.2 常駐外交使節の不在

その一方で、「15世紀のドイツ諸侯は」、神聖ローマ帝国の内と外とを問わず、「常設の外交使節を持たず、諸侯間のコミュニケーションは使者」や後述する手書き通信によって行われていた。「南欧で見られる外交報告 *dispacci* に比肩できるようなものは文書館に残されていない」のである（Zwierlein 同上, 571）。新教側のリーダーの一人 Johann Casimir の補佐官であった「城伯 Dohna の評価によれば、…（外交政策実施上）良質で確実な情報が必要であり」、プラハの神聖ローマ皇帝の宮廷に派遣されたヴェネツィアの大使が総督宛てに、皇帝でさえも各国に外交使節を派遣せず、*gazzette* という手書き通信によって情報を入手していたことを伝えている（Zwierlein 同上, 589.）。これは、イタリアの諸侯はもちろん、サヴォイア=ピエモンテ公国が「常駐の外交使節をローマ、1556年以降ヴェネツィア、フランス宮廷、スイス、フェラーラ、スペイン宮廷、ミラノ、1564年以降には神聖ローマ皇帝宮廷にも」認められていたのとは対照的である（Zwierlein 同上, 332）。

2.2.3 時代の寵児としてのフッガー家の人々

こうした外交活動の状況を埋め合わせるべく、手書き通信がフッガーなどによりもたらされる。ローマの教皇庁図書館所蔵の *avvisi* コレクションである *Urbinati*（1554年から1571年）を収集した Ulrich Fugger は、バイエルン公など諸侯に手書き通信を提供（複写と翻訳、転送）し、「バイエルン宮廷出納局から1552年から1574年まで毎年年初の賞与として30から40グルデンを受領していた」（Zwierlein 同上, 578）。同じく Hans Jakob Fugger も、もちろんフッガー通信のコレクターであった Filipp Eduard と Octavian Secundus の兄弟も、複数の *avvisi* 記者と契約するような圧倒的な経済力と、イタリアの大学での修学経験に基づく語学知識や文化理解、15世紀から連綿と継続した教皇庁やヴェネツィアでの商業取引経験を通じた人的コネクションなどを兼ね備えていた。「1570年前後の時点で、フッガー家の四系統もしくは人物によるフッガー通信が確認できる」が、それは上記の三グループ・個人に Hans/Markus の兄弟を加えた四者である。（Zwierlein 同上, 587）。「フッガー家の人々はイタリアの外交の舞台の背後で成立した手書き通信のテクニクを受け継いだのであり、彼らの商業組織の内側で自らそれを発明したのではない」のである（Zwierlein 同上, 588）。こうした事情を見れば、フッガー家に最大の手書き通信のコレクションのひとつが所蔵されたのは当然の帰結だったのかもしれない。

2.2.4 諸侯間の通信コミュニケーション

ドイツ諸侯は、フッガーを軸にした手書き通信網を利用するとともに、諸侯自身らの間での情報交換も慣習として行っていた。ただその内実も、プファルツ＝ノイブルク公 Philipp-Ludwig の入手通信を調査対象として見ると、通信交換の対象になったのがバイエルン公、複数のヴェルテンベルク公爵、プファルツ公の兄弟、ヘッセン＝カッセル公であり、「1582年から1586年の期間に入信した通信489件中139件（約28%）が、それ以外の経路でそれ以前の時点に（ときには数週間前）入信したものと同一のテキストであること」が判明している。情報内容の重複率が「30%とか45%にまで至るケースもあり」、「フッガー通信や定期通信を含めるとプファルツ＝ノイブルク公 Philipp-Ludwig が受信した手書き通信の70-80%が」いわばデータとしてはゴミのような存在だったことになる。このように「無駄であると分かっている通信を相互にやり取りした理由は、帝国諸侯が互いに培った善良な関係の維持、帝国の *societas* に属する帰属意識」だと説明されている（Zwierlein 同上, 594ff.）。

結局、「強調すべきは、最新の「ヨーロッパの実情（Theatrum Europae）」イメージ形成にあたって、ドイツの諸侯が「商人の手書き通信」に驚くほど依存し」（Zwierlein 同上, 602および606）、「国防上重要な外交情報と遠隔地情報が唯一（フッガーのような）商人による通信でカバーされている」という「甚だしく好ましくない欠損状態」だった点である（Zwierlein 同上, 589）。⁷⁾ こうした状況を「ほぼ1560年以降、外交通信と通常の通信の二重構造で遠方通信が入信していた」サヴォイア＝ピエモンテ公国などと比較すると（Zwierlein 同上, 334）、「イタリアでは外交報告たる *dispacci* と *avvisi* 通信という二重システム」が認められるのに対して、「外交活動の補足でしかなかった手書き通信が、ドイツ諸侯の目には外交活動自体の代替として機能していた」のである（Zwierlein 同上, 609）。

2.2.5 速報性や普遍性（非限定性）への要請

手書き通信の記者に対して、依頼者もしくは顧客がどのような要望を抱いていたのかについても触れておこう。「1562年末にアウグスティーナー派隠修士で歴史家の Onofrio Panvinio が、ローマから週に一度 *avvisi* を提供すると申し出たときに」、Hans Jakob Fugger はニュースの速報性を何よりも重視するように指示した（Zwierlein 同上, 580f.）。「速報性への重点から、帰結として個人的な語りから非個人的な語りへの移行が生じる。つまり伝達する『私』が *avvisi* 全体から消えてしまう」ということも起こった（Zwierlein 同上, 582）。なぜ速報性かという問いに、Zwierlein は「速報性への重点から、現状がどうなのかについて判断を下す」が、それが現状展望となることを指摘し、さらに時間軸にそってニューステキストが積み重ねられて比較される点に着目する（Zwierlein 同上, 583）。

また、Hans Jakob Fugger がそのヴェネツィアでの *avvisi* 記者 Francesco Bracchiero に宛てた手紙の中で、「国家の出来事だけでなく、ドイツ人だろうと、イタリア人だろうと、貴族で

も他の人でも、日々起こる個人レベルの出来事も伝えてもらいたい、……争い、反乱、対立など」「日常的なことも」期待していることを記している（Zwierlein 同上, 584）。これは現在の新聞の定義という報道内容の普遍性（非限定性）に繋がることも理解できる。ついでながら、新聞を規定する四要素として残されている「定期性」と「公共性」のうち、定期性は、当時の郵便の週に一遍というリズムで保持され、最初の印刷新聞にも引き継がれることになる。公共性も非常に高価であるという留保はつくが、経済力以外にアクセスを制限するものはない。

2.2.6 ヨーロッパ化および情報の市場と公共圏の成立

Zwierlein は、フッガーのみならず複数の諸侯が複数の情報源を利用している状況を踏まえ、「1580年代には情報の市場が成立していて、それが匿名で利用できるようになっていた」（Zwierlein 2006, 597）と明言しているが、それは同時に一種の『公共圏』が成立したことを意味する。Barbaricsの研究が示すように、「帝国の南西部、南東部のあらゆる有力諸侯や等族が1580年代にMarkus Fugger/Hans Fuggerの通信やアントワープ、ケルン、アウクスブルク商人の定期通信を受け取っていた」ことは、「手書き通信コミュニケーションの汎ヨーロッパ的性格」（Zwierlein 同上, 598）を物語っている。北イタリアで発生した手書き通信であるが、1580年代以後「逆の経路を辿って、アントワープ、ケルン、アウクスブルク発のドイツ語ニュースが、ヴェネツィアやローマに向かい、そこでavvisiに姿を変えていた」ことも分かっている（Keller/Molino 2015, 130）。こうした情報の逆流も含め、汎ヨーロッパ性の根拠は、欧州の「北部でも南部でも、大部分一言一句同じテキストが、アントワープからローマまで、ウィーンでもプラハでも、北イタリアでも南西ドイツでも筆写され、翻訳され、読まれていた点にある」（Zwierlein 同上, 600）。情報源についても、「フッガーおよびバイエルン公の通信記者Bracchieroとウルビーノやマントヴァ公爵Gonzagaの通信記者とが情報を交換し、同一の記者からの通信を利用」（Zwierlein 同上）する実態があったのである。

3 印刷新聞との関連を通じて見た手書き新聞

ここまでの議論を整理することにしよう。まず、16世紀後半のメディア要素としてどのようなものがあったのかについて、Böningは「Neue Zeitung（不定期な印刷物の形をした報道媒体）、パンフレット、イラストと歌謡印刷物（チラシ状の印刷物）、暦、年代記、見本市通信」を挙げている（Böning 2011, 23）。手書き通信は他の媒体に素材を提供することの多い存在で、これらは互いに影響しあう間メディア性（Intermedialität）をまとった全体像を示している。もちろん、手書き通信と印刷メディアとを競合という次元でとらえることもできる。基本的には、「16世紀の現状展望に関して、手書き混合メディアが印刷メディアに勝っていた」という評価があり、手書き通信の強みとして、「手書きという複製メディアが時間的長所と速報性という

長所および柔軟性で複製数の限界という弱点を克服していた」と考えられていた（Zwierlein 2006, 608）。とは言え、部数の圧倒的な増加は印刷メディアの長所であり、例えば「1673年ニュルンベルクで手書き通信の編集者が印刷新聞業者に関して市当局に苦情を申し出る」ような事態も発生する。「17世紀後半の手書き通信と印刷新聞の両者には内容上共通する部分も多く」、「印刷新聞は発行間隔を、週一度から二度へと短く」していく（Böning同上, 39）。最終的には、「16世紀末以降、見本市通信から月刊新聞、週刊新聞に至るまで、印刷分野で定期性が確保されるにしたがって、二つの混合メディアが組み合わせられ、結果として近代初期の印刷新聞が成立」することにつながるのである（Zwierlein 同上, 608）。印刷新聞と手書き新聞の相違について Keller/Molino は「体裁や規模、テキスト構造、速報性に基本的な変化が無いものの、印刷による部数の増大、価格の低減、…情報の独占性（の低下）」がもたらされたとしている（Keller/Molino 2015, 29）。「世界初の印刷新聞が生まれたストラスブール（1605年）でも、ほかの都市（ハンプルク1618年、シュトゥットガルト1619年など）でも、手書き通信をもとに印刷新聞が成立した」（Böning 同上, 32）。

これまでの議論も踏まえ、Böningによる手書き通信の定義を紹介する。一方のケースでは、「部外秘の内容の厳封されたものや使用者により運ばれた手紙で、極めて情報通で資質の高い人物により取りまとめられていること、秘密もしくは内密で信頼性の非常に高いニュースが含まれ、一人の高貴な受信者に宛てられていることが多く、受信者からは鷹揚に謝礼が支払われ」、もう一方では「手で書き写されたニュースで、週に一度の駆通により…初めて定期的に…あらゆる場所に配達され、職業的もしくは副業としてのニュース販売人により編集され、支払い能力があれば誰にでも」、たいていは「ふつう小規模な利用者層に、ありとあらゆる出来事について、また最も重要な政治的な展開について報じた」場合までを含むメディアである（Böning 2011, 24）。非常に幅のある定義であるが、後半に規定されたケースに限定すると、手書き通信を「定期的な駆通（ordinari Post）により運ばれた通信であることから、…定期通信（Ordinari ZeitungenとかOrdinari Avisen）と呼ぶ」こともあり、印刷新聞が17世紀以降登場すると、Ordinari Postzeitung（定期駆通新聞）、Ordinari Wochentliche Postzeitung（定期週刊駆通新聞）などというように、そのタイトルにも痕跡が見いだすことができる（Böning 同上）。

4 手書き通信の販売と受容の状況

手書き通信は、「遅くとも16世紀後半以降、地域やそれを越えたレベル、国際的レベルで活動する経済的、学術的、政治的エリート層により利用され、不可欠のものと受け取られていた」し、「比較的大規模な商業都市や宮廷都市には、通信記者の仕事が確立し、ニュルンベルク、グダニスク（ドイツ語名ダンツィヒ）、アウクスブルクにはニュースオフィスが成立していた」（Böning 同上, 25）。手書き通信の典型的な受信者が高位貴族であることは間違いなく、

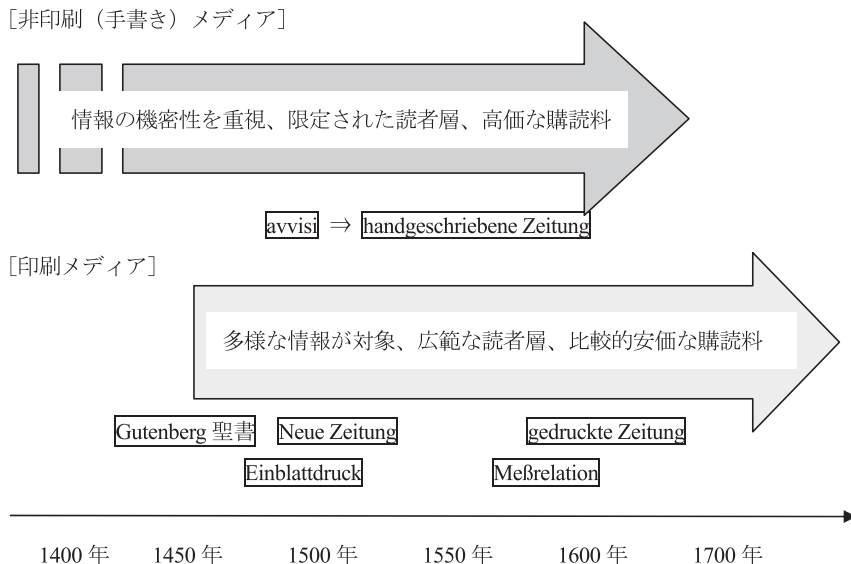
「1610年代から数多の記者から通信を受けた」一人が「ヴォルフエンビュッテル公 August」で、1630年から1666年の記録ではあるが、「年間100ターラー（180グルデン）で毎週の通信を受信」したことが判明している。また、バイエルン公は1552年から1628年にかけて約30の通信契約を結んでおり、ザクセン選帝公は1583年100グルデンでアウクスブルクの Philipp Bray と契約している。都市や修道院がいわば団体として購読することもあり、例えば、「1619年にフライベルク市が時代の危険性（三十年戦争勃発後）に鑑みて年間12グルデンで手書き通信を発注」している（Böning 同上, 29）。また、「ザンクトガレン修道院長は、アウクスブルクからの特約手書き通信月1回もしくは2回に対して、3カ月当たり12グルデンから22グルデンの購読料に加えて、年間3グルデンの賃金を使用者に支払った」。同時代の「ハンプルクの週刊印刷新聞は一部1シリングで、年間購読料で1ターラー（1.8グルデン相当）だった」（Böning 同上, 31）。手書き通信が高価となる制作コストについて、「1706年ニュルンベルクで手書き通信と印刷新聞の両方を編集、販売した Felsecker が、10回分の印刷新聞に138グルデン、手書き通信のニュースに200グルデン出費」したという根拠も示されている（Böning 2011, 39）。基本的にグルデンという貨幣単位が示す通り、「17世紀前半、印刷新聞に比べ手書き通信は5倍から10倍、場合によってはそれ以上高価であり」、「ふつうの人間にとっては支払い不能な金額」だった（Böning 同上, 31）。購読の形態について、有力者や貴族が個人で利用する場合以外に、印刷新聞でも見られた共同購読の形態も確認されている。Böning（2011, 31）が紹介している Irene Jentsch（1937）⁸⁾ によれば、「キッツィングという町の手書き通信の共同購読グループを調査した」結果、「1614年から1624年の間に、21名から構成されていて、そのうち牧師5名、教区監督、市の代官、牧師補、市長、副市長、市参事会員、医師、弁護士、校長、倉庫管理官、市の書記、駅通局長など、数十年後に印刷新聞の最初の読者になる職業層であった」という。そして、「どの構成員にも厳密に1時間だけ購読時間が与えられて、その後次のメンバーに通信を渡さなければならなかった」ようである。「初期には毎週3枚から3枚半ほどの手書き通信でニュースを読んだ」とされている。

手書き通信では部数も問題になるが、「10部から15部が上限」という慎重な推測もある一方で、「手写に再手写を重ねる」可能性もある（Keller/Molino 2015, 30）。若干緩やかな数字は Böning（同上, 406f.）の「25から50部」から始まり、「60部」とか「数百部」まで様々な数字が挙げられて収拾がつかない（Keller/Molino 2015, 30）。常識的には、一次的複写、販売に限定すれば三桁の数字にのることはないと言えるのではないだろうか。

5 結びに代えて

ここまで手書き通信の成立と流通拡大について辿ってきた。印刷という技術手段の有無の相違はあるものの、1605年にストラスブールで生まれた印刷新聞にとってかなり明確な先駆形態

が、手書き通信として16世紀後半に形を整えていったプロセスについて述べてきた。印刷新聞と手書き通信との決定的相違である印刷に着目すると、先行する印刷メディアからいかなる影響や機能継承があったのか、あるいは新たな機能創出があったのかを考える上で、見本市通信 (Meßrelation) や号外新聞 (Neue Zeitung)、チラシ (Flugblatt/Einblattdruck)、パンフレット (Flugschrift) といった印刷物の検討をする必要がある。印刷新聞と手書き通信との同時共存もしくは競合関係があった点については上に若干紹介した。また印刷形態のメディアと非印刷形態のメディア両者の一般的位置づけや経済的な価値などについても、上に書籍を例にした先行研究が存在することにも触れた。筆写することと印刷することの社会的機能や意義づけを含め、メディアとしての機能などを丹念に検証することで、江口 (2014) でも紹介した印刷業者の経済状況という要因以外に、受容者の存在を含め、手書きから印刷への派生の条件を探ってみたい。



注

- 1) Böningは、手書き通信の書き手（記者）として、商人、都市貴族、都市や宮廷の役人、諸侯の総督や代理人とその秘書や書記、郵便局長、印刷人、書籍商人、大学教師、学生、詩人、聖職者など」を挙げ、要件として「一定の言語表現能力と十分な情報探索能力が期待できる職業なら誰でも」なれたという意外な例として18世紀の作曲家Georg Philipp Telemannの例を紹介している（Böning 2011, 27）。当初旨みのある副業（年間100ターラーの収入）と考えたが、作曲とは畑違いの毎週のニュース取材と編集は上手くいかず、契約相手のアイゼナッハ公を満足させることができず、契約を打ち切られたことが判明している。
- 2) イタリアでの avvisi 成立については、Bongi, S. (1869) Le prime gazette in Italia, in: *Nuova Antologia* 5, 311-346., Ancel, R. (1908) Étude sur quelques recueils d'avvisi, in: *Mélanges d'Archéologie et d'Histoires* 28, 115-139., Infelise (2002) *Prima dei giornali. Alle origini della pubblica informazione*, Bari.なども検討

する必要があるが、機会を改めて論じたい。

- 3) Barbarics (2005) および Barbarics-Hermenik (2011) の著者は、グラーツ大学東南ヨーロッパ研究センター所属の同一研究者で、小論を取りまとめるにあたり論文データを快く提供いただいた。ここに記して感謝したい。
- 4) Uwe Neddermeyer が Von der Handschrift zum gedruckten Buch (1998, Wiesbaden) という著作で、印刷書籍と写本との共存関係の推移について詳細な検証を行っている。
- 5) トウルゾー家は15世紀末から富豪ヤーコップと鉱山運営でパートナーとなり、姻戚関係も結んだ有力な商人である (Häberlein 2006, 46f.)。
- 6) Zwierlein は、16世紀後半のフランス宗教戦争 (ユグノー戦争) を巡るプロパガンダ戦において、コミュニケーション理論の第三者効果を想定している。パンフレットによるプロパガンダそのものが、受信者として想定された一般民衆あるいは雇い兵にとって危険であり、何か「行動しなければ」というように新教および旧教双方の諸侯が同様に判断したという仮定である。これにより状況がエスカレートした可能性を指摘している (Zwierlein 2006, 688f.)。
- 7) 「1570年代、1580年代に…手書き通信という新たなメディアの普及」が、有力諸侯のみならず小規模貴族や都市市民層にも及んだことを Henneberg 伯爵やライプツィヒの手書き通信コレクションが示していると指摘している (Keller/Molino 2015, 90)。
- 8) Irene Jentsch (1937) Zur Geschichte des Zeitungslesens in Deutschland am Ende des 18. Jahrhunderts. Mit besonderer Berücksichtigung der gesellschaftlichen Formen des Zeitungslesens. Dissertation Leipzig.

参考文献

- 江口 豊 (2014) 「活版印刷術の展開と新聞成立との関連について」 (研究ノート)
メディア・コミュニケーション研究 67, 1-22.
- (2015) 「駅通制度と新聞成立の関連について」 (研究ノート)
メディア・コミュニケーション研究 68, 57-77.
- (2016a) 「新聞成立期における印刷監督制度について」 (研究ノート)
国際広報メディア・観光学ジャーナル 22, 95-112.
- (2016b) 「フッガー通信について」 (研究ノート)
国際広報メディア・観光学ジャーナル 23, 35-49.
- Bauer, O. (2011) *Zeitungen vor der Zeitung. Die Fuggerzeitungen (1568-1605) und das früh-moderne Nachrichtensystem*. Akademie Verlag, Berlin.
- Barbarics, Z. (2005) Die Bedeutung der handgeschriebenen Neuen Zeitungen in der Epoche Ferdinands I. Am Beispiel der so genannten „Nadasdy-Zeitungen“. In: Fuchs, M./Oborni, T./ Ujvary, G. (hrsg.) Kaiser Ferdinand I. Ein mitteleuropäischer Herrscher. Aschendorff, Münster, 179-205.
- Barbarics-Hermenik, Z. (2010) Handwritten newsletters as interregional sources in central and southeastern Europe. In: Dooly, B. (ed.) The dissemination of news and the emergence of contemporaneity in Early Modern Europe. Ashgate, Farnham, 155-178.
- Barbarics-Hermenik, Z. (2011) The coexistence of manuscript and print: handwritten newsletters in the second century of print: 1540-1640. In: Walsby, M./Kemp, G. (eds.) The book triumphant. Print in transition in the sixteenth and seventeenth century. Brill, London, 347-368.
- Barbarics, Z./ Pieper, R. (2007) Handwritten newsletters as a means of communication in early modern Europe. In: Bethencourt, F. (ed.) Cultural exchange in Early modern Europe. Cambridge, 53-79.
- Böning, H. (2011) Handgeschriebene und gedruckte Zeitung im Spannungsfeld von Abhängigkeit, Koexistenz und Konkurrenz. In: Bauer, V./ Böning, H. (hrsg.) *Die Entstehung des Zeitungswesens im 17. Jahrhundert. Ein neues Medium und seine Folgen für das Kommunikationssystem der Frühen Neuzeit*. edition lumiere, Bremen, 23-56.

- Häberlein, M. (2006) *Die Fugger. Geschichte einer Augsburger Familie (1367-1650)*. Kohlhammer, Stuttgart.
- Infelise, M. (2002) Roman avvisi : Information and politics in the seventeenth century. In: Signoretto, G./Antonietta, M. (eds.) *Court and politics in papal Rom 1492-1700*. CUP, 212-228.
- Infelise, M. (2007) From merchants' letters to handwritten political avvisi: notes on the origins of public information. In: Bethencourt, F./Egmond, F. (eds.) *Correspondence and cultural exchange in Europe, 1400-1700*. CUP, 33-52.
- Keller, K./Molino, P. (2015) *Die Fuggerzeitungen im Kontext. Zeitungssammlungen im Alten Reich und in Italien*. Wien, Böhlau.
- Šimeček, Zdeněk (1987) Geschriebene Zeitungen in den böhmischen Ländern um 1600 und ihr Entstehungs- und Rezeptionszusammenhang mit den gedruckten Zeitungen.
In: Blühm, E./Gebhardt, H. (Hrsg.) *Presse und Geschichte II . Neue Beiträge zur historischen Kommunikationsforschung*. K.G.Sauer, München, 71-82.
- Zwierlein, C. (2006) *Discurso und Lex Dei. Die Entstehung neuer Denkraumen im 16. Jahrhundert und die Wahrnehmung der französischen Religionskriege in Italien und Deutschland*. Vandenhodck & Ruprecht, Göttingen.
- Zwierlein, C. (2010) Fuggerzeitungen als Ergebnis von italienisch-deutschem Kulturtransfer 1552-1570. In: *Quellen und Forschungen aus italienischen Archiven und Bibliotheken*, Bd.90, 169-224.

《SUMMARY》

〈research in progress〉

On the handwritten newsletters and their diffusion

Yutaka EGUCHI

The handwritten newsletter was invented in the 16th century in Italy, probably in Venice (Infelise 2002, 2007) and is one of the forerunners of the printed newspaper. This news media started as a supplement of diplomatic information in Italy and was taken over into Germany by the powerful Fugger family in Augsburg.

The handwritten newsletters spread quickly through the whole Holy Roman Empire via several branches of the most wealthy family of the time and into further areas of Europe (Barbarics 2005, 2011). It is no wonder, then, that the most well-known and vast collection of handwritten newsletters is the Fuggerzeitungen. Cornel Zwierlein (2006) calls the process of diffusion of the newsletters a cultural transfer and pointed out a subtle modification of the function in the German Empire. The established lay out of the handwritten media offered a basic form of news reporting in the modern sense and was printed for the first in Strasbourg in 1605.

But at same time there were already also print media like Meßrelation (half-year almanacs), Neue Zeitungen (irregular printed news leaflets), pamphlets and so on. How the handwritten newsletters came to be combined with printing techniques is the next stage of our research.